“falu”(男子小屋)のなかの物質文化

——ヤップ島ファニフ管区ラン村の1976年における事例——

早　川　正　一

研究の目標と方法

多くの民族社会のなかで共同体の一つとして重要な機能をはたし，あるいは，かつてはたしていたものに男子小屋の存在がある。

ミクロネシアにおいても、すでに18世紀から旅行記とか民族誌のあいだに男子小屋が紹介され[1]，特異な注目をひいているが，さすがに今世紀にいたると，Kubary[2]や Tischner[3]の民族誌としての詳細な記録に加えて，Schlesier[4]や Schneider[5]の社会制度としての本質を求めた社会民族学的な男子小屋の研究が一躍，未開社会における社会構造の一端を明瞭に解き始めた。

さて，ここで筆者が対象にした西カロリン諸島のヤップに関しては，村の男性専用の家屋が二つの型式に区別されている[6]。すなわち，一方は集会所としての pevai と，他方は倶楽部としての特性をもつ falu である。Müller が指摘したように，前者が村としての意志を決定する集合と相談[7]のための機能を有するものならば，後者は同じ年令階級に属する男子のための共同居住[8]を目的とするところに根本的な存在理由があるとおもわれる。

1975年にはじめてヤップ島の考古学的な踏査[9]に訪れた折も，また，1976年に南山大学特別研究費の援助を得て再度訪れた折も，調査基地として寝起きしたのはこのラン村の falu であり，男子小屋の日常生活をつぶさに観察することができた。もともと調査の当初から生産体系の仕組みについて，物質文化を通して歴史的に把握することを主眼としていたので，村内の遺跡や遺物の分布調査あるいは発掘調査など考古学的な方法だけでなく，現在，村の日常生活の中で個々の役割をはたしている生活用具の民族誌的な調査も必要であった。ことに，ヤップの伝統的社会においては村長が魚・食物・貨幣の儀礼的分配の命令，男子小屋・月小屋・聖地などの共有施設に対する責任，祭宴の主催等々の共同活動に対する命令権を持ち，しかも，村民はいくつかの父系拡大家族（tabinau）に従属し，各種の重要な職能を有する各々の村長の指導のもとに性と年令の階梯の中で行動する[10]ものであれば，その要所の一つである男子小屋に内在している物質文化を調査することによって，村の男子にかかわる公共的な一側面が一括してとらえられるのではないかと考えたからである。

その調査の手順として，まず，男子小屋の物品をすべて網羅することから始め，必要に応じて個々の数量・材質・用途・特徴・由来・製作者・使用者などを記載した。そして，上述の目的をできる限り満たすために，この男子小屋を構成している内外の部分を天井・壁面・床面・庭の四つに区分し，さらに，屋内を山側（東側）と海側（西側）として二分してそれぞれに置

かれている物品を丹念に記録し，内容を識別するための分類とその特性を明らかにするように配慮した。

男子小屋の構造とその物質文化の細目

男子小屋の概要（集落図参照）

ヤップ本島の西北方の一隅にあるファニフ管区のラン村には，現在，マテドールのマヤガル（地名）とケグルーフのタエイ（地名）に1軒ずつの男子小屋が存在し，ともにフィリッピン海に臨む海岸に建設されている。歴史上では，本来，今のマヤガルの男子小屋の北方に老壮年階級のための男子小屋が昔あって，タエイの男子小屋は若者宿（tafe na pagal）として作られたといわれている。後者は平面が六角形を呈する椰子の葉葺きの鞍形屋根[11]をもつ伝統的な大型家屋に対して，前者は平面が長方形を呈するトタン葺きの切妻屋根をもつ日本家屋の様式をとり入れた中型家屋であり，近年になってあらためて総村長 waaz（人名）と Mangabuchang（人名）が建てたという。調査の対象としたのは，このマヤガルの男子小屋である。

天　井

屋根は12×6.9 mを計り，米国製のトタン材を約40枚使用し，1枚が245×130 cmあり，日本統治時代に「八尺もの」と称していたという。切妻屋根を南北に貫く棟木（むなぎ）を垂直に5本の柱が支え，さらにそれを直角に5本の梁（はり）が支えて両端を軒桁（のきたけ）で固定し，それらの間にプリズム状の天井空間ができあがる。なお，棟・梁・桁・垂木などは硬質な yagats の丸太材を用いて，椰子ロープでもって装飾的に結び合わせている（実測図(3)参照）。

天井空間を横切る梁を利用して次のような物品が置かれている。

カヌウの帆柱と基幹部品（guth）1　たまな（buyuch）木材，砲弾形基部と滑車つき尖端

ヤップ古来の3種類の舟[12]の一つ popow の帆（wulyang ko mou）を充分に支えて船体に差し込むための堅固な突起と先端に滑車をはめ込んでいるのが特徴。

漁網（nug）1　椰子ロープ材

集団漁法（athing）に用いる大型の引網[13]で，帯状の網の上辺に円筒形の木製浮木と下辺に紡錘形の亜鉛製錘を断続的に固定する。

漁網（selek）1　金網材，本来ならば椰子ロープで編むが，米軍から極細の金網を入手

長方形の網の両側にそれぞれ長竿を担架のように固定して海岸に立て，その両側から沖に向って扇状に luol（椰子の葉を細かく引き裂いて暖簾（のれん）のように垂れ下げた縄）を延長して各々を筏に結びつけ，魚群を囲んで海岸の selek に追い込む。

板材・角材・極細の網1　網はナイロン製，selek のための予備品一式

漁網（cheu）1　たもの一種，テグス網をスプーン状に針金の枠につけて木製の柄に固定

2～4月の夜間に船で外洋へ乗り出し，松明を焚いてそれに集まる飛魚をすくう[14]。

亀漁具の柄 1　竹筒材

竹竿の先端に椰子の幹材で作った鉤を差し込み，海中を泳ぐ海亀の首に引っ掛け，釣り上げる。

釣竿（pau）1　日本製，コロニアの商店にて入手

ヤップ自生の竹は根元から先端まで太さが均一であり，釣竿には不向きである。

釣糸 5　椰子ロープ材，沖縄の漁師から入手

外洋でのマグロ釣り用の道糸で，一組 50 尋あるという。

椰子油（gepgip）2　ウイスキーの瓶入り 1 とコカコーラの瓶入り 1

椰子蜜（athib）1　日本酒の一升瓶の底に少量

生薬の小包 1　椰子の葉を絞ったヤップの秘薬

風鈴 1　日本製，来訪した日本人の土産品

カーテン 3　花模様のプリント生地

この数年来，米国からの平和部隊員や日本からの訪問者のうち，女性が仮宿することがあって用意されたもの。

物干し竿 1　ヤップ産の竹材

物干しロープ 2　日本製の漁業用木綿材

褌（gapalpal）5　化繊材，青色 3 と白色 2，青年用，defan（人名）所有

腰帯（tamei）1　化繊材，黒白の縞模様，defan 所有

T シャツ 3　木綿材，defan 所有

スポーツシャツ 7　木綿および化繊材

パンツ 2　木綿材，defan 所有

ズボン 4　化繊材，defan 所有

ズボン 1　木綿材，子供用，tamang（人名）所有

G パン 2　木綿材，米国製，defan 所有

カーデガン 2　化繊材，うち台湾製 1

ジャンパー 2　ポリエステル材

枕 2　木綿材，パンヤ入り

就寝用シーツ 5　混紡材

この男子小屋の山側（東側）には，日本家屋のように軒を延ばして 11.4×1.8 m の一段低い縁側を設けており，前庭に連がる玄関も兼ねて，昼間における談合や日常作業と，北隅では炊事がおこなわれている（実測図(1)(2)参照）。

縁側の天井，つまり，軒桁から軒先までの天井空間には次のような物質文化がある。

樋（とい）2　プラスチック材，日本製

降雨の時，屋根を流れる雨を受けて東北および西北角のドラムカンに天水を貯蔵しておく

ための重要な役割をはたす。

カヌウの帆（wulyang）1　ナイロン材シート

米国の平和部隊員を通じて1968年入手し，作成

カヌウの帆柱（laly）2　ヤップ産の竹筒材

帆を張るロープ1と滑車1　前者は木綿材，後者は木製であり，これは現代要素

帆先の護付（pongunifeng）1　化繊材，白い布束

三角形の帆材は，本来，パンダヌスの枯葉をアンペラに織って，1枚づつ椰子ロープで結びつけたもので，カヌウを滑らかに速く走らせるのに最適だが，長持ちしないのでナイロンシートを現在は使用。また，この帆を張る2本の帆柱は，上下それぞれ航行に適した独特の弯曲が必要であり，天然の歪みを多くの竹竿から選別することが肝要であるという。なお，帆先には風を呼ぶという意味の護符がつけてあり，本来はパンダヌスの葉で作るのを，細く裂いた布材で代用している。

延縄用の浮子1　ガラス材，球形，直径25㎝，椰子ロープの網で包む

釣竿3　日本製，コロニアの商店にて購入

魚の下顎骨11

生薬の小包1

魚刺し（yofai）1　赤銅製，ヤップでは本来，捕えた魚は束ねないで，編み篭に入れる

大型ビニールシート1　雨除けに使用

壁　面

山側と海側の東西の平は，ともに11.4×1.8m，海岸沿いの南北の妻は，ともに6.6×3.0(1.8)mを数え，外側から屋根とは違った日本製のトタン材をおよそ35枚使用して覆い，196×82㎝の「六尺もの」が使われているという。このトタン造りの壁面は内側から横に3列の胴縁によって釘で固定され，風雨を凌いでいる。山側に4，海側に4，海岸沿いの両側2の合計10本の片引き戸があり，山側は引き戸と交互に5個所の金網窓を設け，通風を考慮して各々にカーテンをつけている。また，妻側には引き戸の上にそれぞれ通気窓と細竹材の棚（uli）がある。なお，引き戸は米国製のベニア合板を使用している。

これらの壁面の内側にある戸袋や窓枠や胴縁の上を利用したり，壁面の下端沿いに寄せて，いくつかの物品が置かれている（実測図(2)(3)参照）。

海側の壁面には次のような物品があった。

貝貨（chubchub）1　小型の黒蝶貝製，椰子ひもで連ねる，waaz 作成

首飾り（lubuw）1　ココナッツの葉製，舞踊用

褌（machiy）1　木綿材，白色，mangabuchng 所有

腰帯（tamey）3　いちびの織布製，淡茶色の無地に紫色の縞染め，mangabuchang 所有

腰飾り（gaal）1　ハイビスカスの繊維材，淡黄色，mangabuchang 所有

ヤップにおこなわれている男子の締め込みは年令階級によって変化する。老壮年の場合，赤色の褌を締め，その上に腰帯を腹に巻いて前面で縦結びにし，さらに繊維状の腰飾りを内股に前後に通して腰帯に巻きつけておく。往古は腰帯に離島から貢納された芭蕉の織布を締めたという[15]。

褌（thuw）4　木綿材，青色3と赤色1，少年用

褌（gapalpal）1　化繊材，赤色，defan 所有

Tシャツ2　木綿材

セーター2　粗毛材，長袖，mangabuchang, defan 所有

ジャンパー1　ポリエステル材，長袖，mangabuchang 所有

ジャケット1　化繊材，黒色，defan 所有

サファリコート1　混紡材，長袖，defan 所有

ベルト1　布製

バスタオル2

タオルケット1

枕1　木綿材，パンヤ入り

ござ3　いぐさ材2とビニール材1，日本製

ふろしき包み1

手鏡1　プラスチック柄つき

電気かみそり1　日本製，日本人訪問者の土産品

ひげ剃りクリーム1　チューブ入り，米国製

カレンダー2　1972年用，米国製，カラー写真印刷．1973年用は写真の部分のみ6枚

小型スピーカー1　日本製

乾電池3　単2が2と単1が1

折尺1　アルミニウム材，米国製，インチ目盛

小鉢1　ほうろう材

あき瓶1　インスタントコーヒー用，米国製

小鳥の羽根10

釣糸2　ナイロンテグス材，糸巻つき，taman 所有

医薬（水薬）6　小型瓶入り，mangabuchang 用2，funapin 用1，不明3

医薬（錠剤）6　小型瓶入り，mangabuchang 用2，likin 用1，不明3，すべて半分程残ったまま

風邪薬1　小瓶入塗り薬，小児用

正露丸2　日本人来訪者から入手

山側の壁面には次の物品があった。

海亀用漁具（lumagwel）1　木製鉤に竹筒の柄

漁網（nug）の未加工品 1　木綿糸製

漁網すき（wolul）2　竹製，大型と小型，日本統治時代に沖縄の漁師から入手

魚刺し 7　大型真鍮製 1，中型赤銅製 6

大魚の尾（manuw ko falu）9　マグロやヒラアジの捕獲を記念して男子小屋に限ってつける装飾

腰飾りの素材 2　ハイビスカスの繊細

頭飾り（teeliaw）1　子供の舞踊用

回転式ドリル（burbur）1　木製で，錐の柄にひもを結び，その撚りを利用して廻転させる[16]

くぎぬき 1　大型，日本製

のこぎり 3　日本製，片刃 2 と両刃 1，うち一つは柄なし

油差し 1　大型，船舶修理用

ミシン油 1　小缶入り，米国製

じょうご 1　プラスチック材，ランプの灯油用

ござ 2　いぐさ材とビニール材，日本製

パンツ 1　下着用新品

コップ 4　中型と小型，ガラス製とプラスチック製

哺乳瓶 1　小型，乳児用

あき瓶 8　ガラス材，米国製 6 はインスタントコーヒー・粉末ミルクの瓶，日本製 2 は佃煮・めんつゆの瓶

あき缶 2　米国製 1 はナッツの缶，日本製 1 は蚊取線香の缶

マッチ箱 1　小型，日本製，空箱のみ

Salad dressing 1　中型瓶入り，半分使用し，残りは腐敗したまま

医薬用小瓶 7　mangabuchang 用 2，defan 用 1，funapin 用 1，ragam 用 1，不明 2

医薬（塗り薬）3　mangabuchang 用 1，patilic 用 1，不明 1

オモチャの鉄砲 1　プラスチック材，likin が子供に購入

印刷絵画 2　米国製，引き戸の内側に貼付，Columbia と Oregon の風景画

南側の妻の壁面には次のような物品が寄せてあった。

教科書 5　米国製，小学校用，tamang 所有

ノート 4　うち 1 冊は小型編み篭に入る，tamang 所有

雑記用紙 2

写真アルバム 2　defan の高校生活

水筒 1　プラスチック材，日本製

ござ 1　ビニール材，日本製

医薬の小瓶 3　小型の編み篭に入る

ペンキ混合用の缶 1 と中型の刷毛 1

北側の妻の壁面一帯には次の物品が置かれていた。

漁網（nug）3　大型は椰子ロープ材で長さ8尋，中型2張は木綿糸材で長さ66尋とのこと

漁網用浮子18　小型，プラスチック材

漁網用錘13　小型，亜鉛材

鉤素つきの釣針5　鋼鉄のワイヤーの鉤素にマグロ釣り用の大型鉤，沖縄の漁師から入手

木綿ひも1　漁網用

テグス1　漁網用，日本製，0.5mmの500m巻き

銅線1　漁網用その他

あかとり（niim）1　木板材，カヌウの漏水をくみ出す道具

大魚の尾2　男子小屋の記念的装飾品

船外機の部品2　米国製，トランスミッション部のみ

滑車1　中型，鉄材，入手したもののカヌウの帆には使用できず，放置のまま

ボルトとナット4　中型，缶入

のこぎり3　米国製，大中小各1，大型のみ2人で両端から引く，米軍帰国時に入手

回転式ハンドドリル1　鋼鉄材，米国製

すみつぼ1　日本製，大工道具として日本統治時代に入手

ペンキ2　米国製，赤色と黒色各1，カヌウの船体塗装用

石油ランプ1　小型，日本製，夜間の屋内照明用

あき瓶1　小型

椰子の繊維1　編み篭に入る

外壁には縁側に限ってのみ，次の2品が透き間に差し込んであった。

漁網すき（wolul）2　小型，竹製

椰子の葉脈3

生薬の原料で，強風の際に地上に落ちた椰子の葉が直接突きささって立っている稀なもの（aul）を，kangnakanalangという草葉と混ぜてその葉汁を使う。精神安定薬としてヤップの秘薬の一つといわれる。

床　面

床面は11.2×6.4mの規模を有し，高さ70cm（縁側は50cm）に積み上げたサンゴ礁の石段に砂をまいて，その上にヤップ産の竹筒を割って広げ，床材としている。そして，東西の平側には，壁面に沿って縁側を含めて5本づつ合計15本の重くて硬いyagatsの丸木柱が並んでいる。これらの屋根を持ち上げ，壁を支えている主柱は，すでに建設時に土台（unubei）に直接立てられているので堅牢このうえない。海側の竹床にはびんろうじゅの丸木で長方形に区切った独特の枕（gayul）が並べられ，同時にこれは年令階梯に即した男子小屋内における生活の指定区画を形成している。つまり，北寄りが上位，南寄りが下位になっている。なお，本来，中

央に並んで造られている照明兼料理用の炉(mowat)はないが，金網張りの魚の分配台(rorow)は設けられている(実測図(1)参照)。

海側の床面や現在使用していない魚の分配台1には次のような物品が置かれていた。

〔床　面〕

石貨（fe）3　淡茶色石灰岩材，中型および小型

この男子小屋に所属し，waaz と mangabuchang が所有する貴重な石貨のひとつがあり，丸木柱に立てかけて背掛け（maglei）にしているが，本来は財産と地位の象徴である。

貝貨（chubchub）1　黒蝶貝製の椰子ひもでつないだもの，編み篭に入る

腰帯（tamey）1　いちびの織布製 mangabuchang 所有

腰飾り（gaal）1　ハイビスカスの繊維材，mangabuchang 所有

褌（thuw）1　木綿材，赤色，tamang 所有

パンツ3　木綿材，漁労用および下着用

Tシャツ2　木綿材

アロハシャツ1　木綿材，defan 所有

半ズボン1　混紡材，漁労用，mangabuchang 所有

長ズボン1　化繊材，defan 所有

Gパン1　木綿材，ベルボトル，defan 所有

皮靴1　茶色，半長靴，米軍放出品，tiin 所有

ござ5　パンダヌス材2はヤップ製，いぐさ材1とビニール材2は日本製

パンダヌスの葉で編んだござは chob といい，mangabuchang の就寝用

シーツ1　混紡材，就寝用，tamang 所有

枕2　木綿材，パンヤ入

タオルケット1

バスタオル 2

木枕（gayul）1

洗剤1　米国製，洗躍用，defan 購入

焼石灰の粉末（wech）1　小瓶入り，米国製ナッツ瓶を再利用

びんろうじゅの実（buw）を割ってふりかけ，きんまの葉（gabui）に包んでかみしめ，その渋味を嗜好するのに用いる[17]。

あき瓶3　洋酒瓶2とビール瓶1，米国・英国製

あき缶1　大型ビスケット缶，日本製

ポリタンク1　大型10ガロン入，米国製

小皿1　陶器，蚊取線香用

椰子の実殻2　乾燥させ雨天の点火用として保存

のこぎり1　中型片刃，米軍放出品

懐中電燈のゴムケース 1　日本製，漁労用

じかたび 4　日本製，漁労用，1975 年に日本人来訪者が贈る，mangabuchang 所有

水中めがね 1　単眼式，日本製，tamang 所有

釣針 3　小型，アルミ缶入，tamang 所有

延縄用浮子 1　プラスチック材，大型球形

延長コード 1　携帯ラジオ用，日本製

セロテープのケース 1　プラスチック材，日本製，セロテープなし

通信販売のカタログ帖 1　米国製，1974 年秋冬号

雑誌 4　米国製，News Week の 1970 年 3 月号と漫画，ボール箱入

新約聖書 1

ノート 4

編み篭 1　小型，ノート入れ，tamang 所有

〔魚の分配台〕

貝貨（ngabuchai）2　大型の白蝶貝製，椰子ひもの把手つき

腰帯（tamey）2　新品，紙袋入り，mangabuchang 所有

ファイス　タバコ 1　Fais 島特産のタバコで，紡錘形にパンダヌスの葉で包装してある[18]

小鳥の羽根 2

魚釣りの仕掛け 3　大物用，竹筒の糸巻きに釣針とナイロンテグスの道糸つき，木箱入り

水中めがね 2　日本製，双眼式は mangabuchang 所有，単眼式は defan 所有

水中銃の弦 1　ゴム材

子安貝 1

蛮刀（shipow）1　鋼鉄材，日本製

かんな 1　日本統治時代の大工道具のひとつ

懐中電燈 4　ゴムケースつき，日本製，乾電池入り，大型 1 と小型 3 のうち 1 個不良

携帯ラジオカセット 1　日本製，mangabuchang 購入

小型カセットレコーダー 1　日本製

カセットテープ 8　米国製 4 と日本製 1

Hawaiian 1，Carpenters 1，David & Tylos 2，日本軍歌 1

石油ランプ 3　英国製カナダ製日本製各 1，日本製を除き発光部破損

理髪用はさみ 1

殺虫スプレイ 1　米国製

蚊取線香 1　日本製，空箱

マッチ 6　日本製

石鹸 1　米国製

巻タバコ 10　米国製，1 カートン入

常備薬 5　外傷用その他，ボール箱入

あき箱 1　発泡スチロール材，中型

紙コップ 11　上記の箱に入る

七徳セット 1　皮ケースつき，日本製，上記の箱に入る

ピンセット 1　上記の箱に入る

あき瓶 1　ポリエステル材，日本製シャンプー用，上記の箱に入る

電線用コード 1　ケース入，米国製，上記の箱に入る

ぬいぐるみ 1　コンドル，土産品

こけし 1　日本製，土産品

薬用酒 1　日本製，土産品

洋酒 6　極小瓶入，すべて空瓶，土産品

自動車の鍵 1　鎖つき，日本製，土産品

記念写真 6　日本人訪問者から送付

研究論文 1　ラン村に関する牛島巌氏執筆の南山大学人類学研究紀要の抜刷り，贈呈品

山側の床面には次の物品が置かれていた。

船外機 1　米国製，18 馬力，修理必要

船外機用小型部品 5　極小の編み篭入り

水中銃 1　木柄とゴム材，米国人ダイバーの所持品をみて mangabuchang が作成

漁網用錘 9　亜鉛材，日本製

じょうご 1　大型ステンレス材，米国製，船外機のガソリン入れ

ポリタンク 1　大型，米国製，船外機用のガソリン入れ

道具入れ木箱 1

船外機用小型プラグ 1　上記の木箱に入る

水中銃のゴム破片 2　上記の木箱に入る

釣針 1　大型の二又式，上記の木箱に入る

中型ペンチ 1　上記の木箱に入る

小型ドライバー 1　上記の木箱に入る

釘 16　上記の木箱に入る

手提げつき木箱 1　大工道具入れとして使用

大工用のみ 4　日本統治時代の叩きのみで，横のみ 2，縦のみ 1，円のみ 1，上記の箱入り

やすり 3　日本製，断面が正三角形，二等辺三角形，円形おのおの 1，上記の箱入り

両頭ハンマー 1　米国製，上記の箱入り

スパナー 1　小型，米国製，上記の箱入り

かなずち 1　小型，日本製

釘抜きつきハンマー 1　米国製

細身のこぎり 1　日本製

鎌 1　日本製

ハンマー 1　大型

釘 22

蛮刀 2　日本製

手斧（tow）1　鉄斧が木柄に椰子ひもで固定

工具の把手 1　破損品

飯台 1　mangabuchang が日本人来訪者のために食卓として 1974 年に作成

テーブル 1　mangabuchang が日本人調査者のために作成

セメント 1　大袋入り未使用，ただし，凝固して使用不能，台湾製

ペンキ 8　缶入り，黒色 5 と赤色 3，日本製 6 と米国製 2，カヌウの船底塗装用

ペンキ混合用の缶 1

刷毛 2　大小各 1

石油ランプ 3　大型 1 は米国製，小型 2 は日本製

ポリエチレン瓶 2　米国製，灯油入れに洗剤容器を再利用

灯油入りのポリタンク 1　大型方形，照明用

ござ 1　椰子の葉製

枕 1　木綿材，パンヤ入り

ひさし付き帽子 1　木綿材，米軍放出品，mangabuchang が漁労に使用

開襟シャツ 1　半袖，mangabuchang 所有

乾電池 16　単 1 と単 3，日本製 9，香港製 6，米国製 1

蚊取線香用金具 1　日本製

湯わかし 1　米国製，平和部隊員から入手

把手つきコップ 1　プラスチック材，目盛りき，米国製，平和部隊員から 1969 年に入手

中皿 2　プラスチック材，米国製，平和部隊員から 1969 年に入手

おろしがね 1　ステンレス材，米国製，コプラや boi の実を削る

あき瓶 7　インスタントコーヒー瓶 4 は米国製，洋酒瓶 2 は英国製，日本酒瓶 1 は日本製

あき缶 1　ペンキの大缶

ポリエチレン瓶 2　洗剤容器，米国製

焼石灰の粉末 1　インスタントコーヒーの小瓶を再利用，米国製

インスタントコーヒー 1　中瓶入り，米国製

インスタントミルク 1　中瓶入り，米国製

通信販売カタログ帖 2　米国製，1973 年秋冬号と 1974 年春夏号

漫画雑誌 3　米国製

教科書 7　英語 6 と算数 1，Legends of Micronesia ほか

教科指導書 2　英語, A journal for the teacher of english outside the United States vol.8, 1975

鉛筆 1

ノート 4

白紙 12

カバン 2　ビニール材

鉛筆削り器 1　ハンドル回転式

色鉛筆セット 1　日本製の 12 色，日本人来訪者の土産品

サインペンのセット 1　日本製の 6 色，日本人来訪者の土産品

ゴム風船 2　日本製，日本人来訪者の土産品

歯ブラシ 1　米国製，未使用

小型旅行用トランク 1　皮革材，西ドイツのシール付き，ilibow 所有

大型ダンボール箱 1　日本人調査者の器材収納

高瀬貝 3　大型

縁側の床面においては，北寄りの方に次の物品があった。

貝貨（chubchub）1　黒蝶貝を連結したもの，編み篭入り

漁網（nug）1　木綿テグス材，破損品

漁網（chew）1　たもの一種，小枝材で楕円形の枠を作り，椰子ひも製の網をつける。柄は竹材

飛魚をすくい捕る chew よりもやや大きく頑丈で，引網の nug で包囲した魚をすくい捕るのに用いる。

漁網（kef）2　たもの一種，細竹でP字形の枠を作り，木綿材の網を袋状に張る．左右一対

両手に左右に開いて持ち，岩礁の浅場にいる魚を数人でとり囲んだり，一人で干潮時の水溜りにいる魚をすくい捕る[19]。

漁網（magagow）1　たもの一種，Y字形の木柄を上下に重ね，その二又の間に網袋を張る[20]

マングローブの根元に潜んでいる魚に対して，ちょうどシャベルで物をすくうような手つきで，魚を探し求める大型のたも。

うけ（yanup）1　割竹を椰子ひもで結んでかまぼこ形の篭にし，一端に凹んだ魚の入口を作る[21]

風の強い時に岩礁の底に沈めておく。この場合，魚の入口を潮流の反対側におき，入口を除いて全体を石で覆ってしまう。

漁網掛け（iyen）2　丸太材，細長く重い nug を数人で絡まないように支えて運ぶ十字形の棒

スクリュウ 2　アルミ合金材，船外機の部品で，現在は子供の玩具

貝槌（magang）1　しゃこ貝製で重く，乳棒状をなす，作成に 1 年を要す，用途はパンの実潰し

叩き石（mafulai）1　緑泥岩の円礫材，楕円形の石の一端に打痕が明瞭，用途は薬草を潰す
皮むき具（murup）1　椰子殻材で扁平な紡錘形を呈す，用途はタロ芋の根と外皮を取り除く
コブラ掻き具（osageg）2　刃先（goy）はジュラルミン材と鉄材の金具を利用し，固定台は木製
木登り用の輪（gabing）1　椰子の葉脈材，びんろうじゅの実を樹に登って取ってくる足輪
ほうき（walguw）1　椰子の細い葉脈を束ねたもの，用途は蠅たたきも兼ねる
ごみ入れ2　椰子の葉材の編み篭，びんろうじゅの嚙みかすやタロ芋の皮を入れる
編み篭（geb）3　椰子の葉材，用途はタロイモやパンの実など栽培植物と小魚を入れる
敷きもの（chilin）2　椰子の葉を長方形に編む
蛮刀1　鋼鉄材，日本製
シャベル2　一方は細刃の日本製，他方は柄なし
金床1　鋼鉄材，漁船の部品を再利用して薬草を潰すのに用いている
大鍋2　アルマイト材，日本製，1967年に大魚や豚肉を煮るために購入
中鍋1　アルミニウム材，ドイツ製で約20年前にドイツ人医師から入手
大やかん1　アルマイト材，日本製，1969年に購入
把手つきコップ1　ほうろう材，中型
まないた1　プラスチック材，日本製，日本人調査者から1973年に入手
石油こんろ1　鉄材，日本製，最初のものは1968年に購入
じょうご1　アルミニウム材，中型，日本製
食塩入り容器1　プラスチック材，中型
砂糖入り容器1　プラスチック材，中型
あき瓶2　米国製のインスタントコーヒー瓶と日本酒の一升瓶
ゴム手袋2
ペンキ1　缶入，橙色，日本製
いす1　板材，老朽化して使用不能
材木15　一辺が12㎝（4寸）の角材，waazの預かりもの
タロ芋（lak）3　mangabuchungの食用として妻belawalが皮つきのまま運んでくる
椰子の実（marew）1　成熟した椰子の実の胚は脂肪に富み，削ってそのまま食す
高瀬貝1　大型

庭

庭とは，この男子小屋が建てられている土台（unubei）の全面を指し，東西15.3×南北19.5mのおよそ300㎡にわたる範囲である。西側(海側)から北側にかけてが狭長に反し，東側(山側）から南側にかけては幅広で，ことに東に面する前庭は約120㎡を数える。広汎な椰子林につながるこの前庭では，男子小屋における日常生活の多くの活動がおこなわれ，そこにある物

品はすべてこの男子小屋に所属する（実測図(1)参照）。

西側（海側）の庭には次の物品があった。

ふみ石 4　扁円形のさんご礁が各々の戸口の直下にあり，用途は素足についた砂をぬぐう

ドラム缶 3　天水の貯蔵用，米国製，用途は水浴びと洗濯

物干しロープ 1　木綿材，漁労用を転用

物干し竿 2　木材，物干しロープを支える

褌（thuw）2　木綿材，赤色

腰帯（tamey）1　いちびの織布製，mangabuchang 所有

長ズボン 1　化繊材，defan 所有

北側の庭に品物を置くことはほとんどなく，戸口の直下にふみ石 2 があるだけである。

南側の庭には次の品物が置かれていた。

ふみ石 1　扁円形のさんご礁，戸口の直下にあり

漁網干し竿（damitang）2　細い丸木材，左右両端にX字形の竿受けを立て，それに棒を渡す

漁網掛け（iyen）3　丸太材，十字形

漁網（nug）5　木綿材 3 とナイロンテグス材 2

漁具（luol）2　椰子なわに椰子の葉を細かく暖簾状につけて nug の両端に結び，魚群を追込む[22]

漁網（chew）1　木柄の先に竹棒材の円い枠をつけ，椰子ひも材の網袋を張る

延縄用の浮子 1　プラスチック材，大型球形

高所の葉を取る長竿 1　竹筒材，先端にその都度ナイフを縛りつける

びんろうじゅの実を樹に登って取る足輪と同じく，きんまの葉や椰子の葉を落すため。

椰子の皮むきの棒（gesthiu）1　果汁を飲むために，若い椰子の皮をむく地面に刺した細棒

くまで 1　割竹材，ごみ取り用，日本統治時代のものをまねて mangabuchang が作成

物干しロープ 2　木綿材，漁労用を転用

自動車のタイヤ 2

自動車のチューブ 2

なお，この南側の庭に隣接する椰子林には次の三つの施設と物品があった。

カヌウ（popow）1　島内の伝統船としてもっとも普遍的，舟の首尾が二又に割れるのが特徴[23]

オカオ村の舟大工 pinii を雇って約 5 ケ月を費し 1972 年に完成した。海の神（maday）の加護が得られるように，材木の伐採，水ひたし，工作，塗装，進水式などのいろいろな過程において儀礼的な椰子の実，びんろうじゅの実，タロ芋，貝貨，石貨を供物や謝礼として供与したという。

ごみため 1　海岸近くに男子小屋から出されるすべての廃物がここに集積している

便所 1　土台はコンクリート造り，屋根と壁はトタン材，開き戸をつけ，便器はドラムカン

外国人訪問者が多くなり，1969 年に付設

東側（山側）の前庭には次のような物品があった。

石貨（fe） 2　縁先の中央と東南角に並ぶ，ともに1972年にカヌウ作成の際，手に入れる

ふみ石 1　扁円形のさんご礁が縁側沿いの東南隅にある

ドラム缶 3　天水の貯蔵用，米国製，用途は炊事，水浴び，洗濯

水浴場 1　竹筒柱に四方を椰子の編み葉で囲う，1973年に最初は外国人訪問者のために付設

ドラム缶 1　天水の貯蔵，水浴用

すのこ 1　木板材，水浴用

手おけ 1　料理用小麦粉の大型あき缶を利用，米国製，水浴と洗濯

洗面器 1　ほうろう材，中型

鏡 1　破損品

食器棚 1　竹筒材と割竹を用いて方形の台を作る

大鉢 2　プラスチック材1とほうろう材1，mangabuchang 使用

小鉢 2　ほうろう材，mangabuchang 使用

中皿 2　プラスチック材，mangabuchang 使用

鉄鍋 1　鋳物製，日本軍の遺留品，現在は片方の把手が破損し，豚の残飯入れに利用

魚刺し用ロープ 1

浮子 1　発泡スチロール材の破片を利用

褌（thuw） 2　木綿材，赤色と青色，子供用

料理用石炉（muchol） 1　長円礫3個をもって囲む

炉の風避け 1　トタンの破片を利用

焼魚用金網 1　建築用金網を利用

漁具の置き台 1　椰子の木を切った根元を利用

やす（piskang） 3　鉄製の三つ又状刺突に竹柄をつける

餌入用容器 1　プラスチック箱を利用した子供の魚釣り用，tamang 所有

釣竿 2　ヤップ産の細竹材，子供の魚釣り用，tamang 所有

シャベル 1　中型，柄なし

海　岸

この男子小屋の真下の波打ち際にも，若干ではあるが，付随する物品がある。

舟庫（sipal） 1　4本の丸木材を使い，天井を平担にトタンで覆う

いかだ（fafat） 1　ヤップ産の太い竹筒を数本並列させ固定する．中央に長方形の台座あり

石貨 1　この男子小屋に所属する石貨のうち，最大径のものが砂浜に横たわっている

物質文化の分類と検討

このマヤガルの男子小屋に現存するすべての物質文化は前章において列挙した通りであり，筆者の分析に必要な最小限度の注を逐一付して，当初の目標を達成できるように留意した。

その総数は，男子小屋それ自体と付随する施設を含めて789におよぶ。そして，個々の物品を日常生活における役割ごとに分類して整理したのが別表である。

区分しえた項目として，施設・漁労具・作業具・調度品・衣料・飲食品・書類・財産・その他など9類をあげることができ，さらに，それぞれ伝統文化と新来文化の2種に分けることができる。なお，項目によっては関連し付随する消耗品をも含み（例えば，懐中電燈の乾電池），寸法の大小に関係なく個数を数え(例えば，カヌウ1と釣針1)，容量の如何んを問わず，液体は容器とともに個数とした(例えば，灯油入りポリタンク1)。勿論，これらの処理についての妥当性には問題があろうが，数量分析を加味した考察の必要上に合わせた包括的処置にほかならない。

施設とは，本来，持ち運びしない固定した装置であり，合計19，全体の2％に相当する。そのうち，男子小屋をはじめ，庭，ごみため，石炉，漁具置き台，魚の分配台，舟庫などの伝統施設と，水浴場，便所，ドラム缶，食器棚，樋などの新来施設とに分かれ，後者が前者に対して約3/5を占め，相対的にいくらか多い。しかし，前者の中には伝統文化として充分に役割をはたしているものがある一方，共同漁労の魚を料理する分配台とかカヌウを碇泊させる舟庫はすでに形骸化しつつあるのが現状である。また，後者の大部分は男子小屋の存続にさほど影響を与えるとは思われず，わけても水浴場や便所などは近年における外国人の訪問が設置の端緒であって，男子小屋本来の設備ではない。

漁労具は，舟，漁具，付属品，漁労の呪物を含み，合計155，全体の20％にあたり，後述の調度品とともに豊富な部類に属する。伝統漁労具としてカヌウや筏などの乗物，引網とたもを主要とする漁網，漁網掛け，外洋での釣具，刺突具，豊漁を願う呪物など圧倒的に豊富であり，男子小屋における伝統文化の主体を構成している。それに反して，新来漁労具は，船外機の部品，水中めがね，水中銃などきわめて貧弱であり，漁労具全体の1/6ほどを占めるにすぎない。

作業具は，男子小屋の内外において日常の作業一般にかかわる工作具を主体とするが，なかには後述の調度品と密接に関連し，判別のむづかしい品物も含まれていて，合計135，全体の17％におよぶ。伝統作業具としては，貝槌，叩き石，手斧，回転式ドリル，椰子の皮むき棒，コプラ掻き具，タロ芋の皮むき，木登りの輪など11に対して，外来作業具は，のこぎり，かなづち，のみなどの木工具とペンキや刷毛の塗装用品，さらに各種工作消耗品など大部分を占有しており，日本統治時代の大工道具と米軍進駐以来の工具によってそのほとんどが構成されている。これは後述の調度品とともに，前述の漁労具とまったく反対の傾向にあることがわかる。

調度品は，主として男子小屋の内部における日常生活に必要な家具，寝具，料理食器，小間物などで構成され，もっとも雑多で数量も多く，合計213，全体の27％を占める。伝統的な調

マヤガルの男子小屋における物品の分類表

	伝統文化	新来文化
施設 19－2％	男子小屋，庭，魚の分配台，石炉，魚具置き台，舟庫，ごみため 7－37％	水浴場，便所，とい，ドラム缶，食器棚 12－63％
漁労具 155－20％	カヌウ，いかだ，漁網，うけ，釣具，付属品，やす，漁網かけ，魚骨 132－85％	船外機，水中めがね，水中銃，じかたび，餌入れ，釣竿 23－15％
作業具 135－17％	貝づち，たたき石，皮むき具，コプラ掻き，やしの皮むき棒，手斧，ブルブル 11－8％	日本の大工道具，米国の工作具，ボルトナット，釘，ゴム手袋，ペンキ，刷毛 124－92％
調度品 213－27％	ふみ石，編みかご，魚の尾の装飾，木枕 26－12％	なべ，食器，飯台，鏡，電機製品，乾電池，あきびん，ござ，シーツ，枕，石油ランプ，灯油 187－88％
衣料 76－10％	ふんどし，腰帯，腰飾り 27－36％	シャツ，パンツ，ズボン，タオル，帽子，洗剤 49－64％
飲食品 70－9％	タロいも，コプラ，魚，ファイスタバコ，生薬，焼石灰，やし油，やし蜜 14－20％	巻タバコ，食塩，砂糖，インスタントコーヒー，医薬 56－80％
書類 70－9％	編みかご利用のかばん 1－1％	教科書，ノート，鉛筆，かばん，雑誌，カレンダー，記念写真，カタログ帖 69－99％
財産 12－1％	石貨，貝貨 12－100％	0－0％
その他 39－5％	貝殻，小鳥の羽根，生薬（外傷用） 19－49％	預りもの，自動車のタイヤ・チューブ，医薬（外傷用） 20－51％
総計 789	249－31％	540－69％

度品としてはほとんど見るべきものがなく，戸口にあるふみ石，仕切りを兼ねた枕，編み篭，大魚の尾で作った装飾など26にすぎない。一方，外来調度品は，ござ，シーツ，枕などの寝具，鍋や皿の食器類，石油ランプや懐中電燈の照明具，携帯ラジオやカセットテープの電機製品などによって大部分を占め，日常生活にはいかに容易に外来文化が採用されるかを知ることができる。

衣料は，合計76，全体の10%にあたる。この男子小屋の構成員によって身につけられるもので，伝統的衣料としては，褌，腰帯，腰飾りに限定されるが，外来衣料は各種のシャツ類やズボン類を主体に，若干のタオル，靴，洗剤など衣料の⅔を占めている。そして前者が村内生活に用いられるとすれば，後者は外出や漁労に臨んで用いられるし，また後者はほとんど青年層の衣類であることがわかる。

飲食品は，合計70，全体の9%にあたる。伝統的なタロ芋や椰子の実の主食類とわずかな焼石灰，生薬，ファイス　タバコなどと，新来的な食塩，砂糖，インスタントコーヒーとミルク，タバコのほかに病院からの投薬があり，やはり後者は飲食品の4/5を占めて多い。なお，医薬は男子小屋の構成員のほとんどに与えられたものだが，それ以外はもっぱら男子小屋の支配者の一人である mangabuchang のための食品である。

書類は，男子小屋に生活している青少年の所持する学校や読書に関連したものであり，教科書やノートのほか，雑誌，カタログ，カレンダーなど近年の外来品ばかりであって，合計70，全体の9%にあたる。唯一の伝統品として通学のためのカバンに利用された編み篭が存在するだけである。

財産は，この男子小屋に所属する石貨と貝貨をさし，ヤップにおいては伝統習俗の中で財貨として通用すると同時に権威の象徴でもある。合計12，わずか1%にしかあたらないが，ヤップ社会の原動力としてもっとも価値の高い伝統文化である。

その他は，貝類や小鳥の羽根とか自動車のタイヤやチューブなど用途の定まらないものと材木，ダンボール箱などの預りもので，合計39，全体の5%にあたり，上記のどの項目にも該当しないので除外した。

そこで以上の9項目に分類した789を数える男子小屋の物品に関して，Murdock のいう共通分母（Common Denominator）[24]としてのこれらの項目に現われた各々の割合から考察しうるこの男子小屋の性格を明らかにしておきたい。

第一に，9項目のうちで調度品がもっとも多い事実は，これまでに男子小屋について言及した多くの民族学者が指摘している“Klubhaus”としての基本的特性をうかがうことができるが，これだけでは説得力に乏しく，この点を明瞭にしえない。むしろ，調度品・衣料・飲食品・書類など55%の日常生活品が存在する事実の方が clubhouse として，しかも衣料と書類の内容に明らかなように young men's clubhouse としての特性を認めることができる[25]。これは，この男子小屋の管理者の一人である　mangabuchang　がケグルーフとアチュロ（地名）の若者頭

（raga ni pagal）の地位にあることからも明瞭であろう[26]。

第二に，9項目のうち，調度品に次いで豊富な漁労具の存在は，この男子小屋が若者宿としての機能と同時に漁労具の収納場所としての機能を有していることである。いいかえれば，漁労活動の基地あるいは拠点といっても過言ではない。なぜならば，多勢で漕ぎ出す伝統的カヌウや天井に置いてある大型の引網などは，現在では形骸化しつつあるとはいえ，ラン村をあげての共同漁労に不可欠なもののはずである。しかも，管理者 mangabuchang が漁労村長(suong ko fita）として集団漁労の指揮者および海の呪術師（tamerong ni madai）を兼任している事実があるからである[27]。杉浦健一が falu を「集会所兼舟小屋」と称したのは，まさにこのような特性を指摘したものであろう[28]。

第三に，日常もっとも頻繁に着用される衣料の所有者を通して，また同様に，医薬瓶に明記された人名によってこの男子小屋の構成員を知ることができたが，それはラン村の男性のすべてではなくて，waaz と mangabuchang 自身とその拡大家族の範囲内の未婚男子に限定されているという事実である。ここに Schurtz が“typische”（典型的）と述べた男子小屋の一性格がみうけられる[29]。男子小屋の内外に安置してある石貨が，例えば，カヌウの作成に際して拡大家族の長たちにもたらされたという事実と相俟って，この男子小屋がラン村における二つの拡大家族の公共的かつ中心的特性を備えているといえる。

第四に，作業具が漁労具に匹敵する数量を注目したい。男子小屋でおこなわれる作業の主体は確かに漁労活動であろうが，拡大家族の中心として即座に常繕活動に対応できることも必要であろう。ことに外来文化として日本製や米国製の木工具が目立つのは，これらを使いこなす技術を修得している男子小屋の長たちがいるからである。しかも，作業の都度，同居している青少年たちはそれらの使用方法を見習う機会が与えられる。その意味でこの男子小屋は技術収蔵あるいは道具箱としての機能と同時に実業教育の場としての特性を有する。

第五に，もともと男子小屋には外賓を接待する要素が認められているが[30]，この10年以内ににわかな外国人の訪問と宿泊の影響によって，水浴場や便所の付設とか飯台やカーテンなどの調度品の出現にみられる異質な外来文化の急増は，きわめて限定された範囲内での部外者の滞在が許される一面を示している。つまり，この男子小屋は，入村の許可と疵護のもとで迎賓施設となりうる特性があらわれている。

このようにマヤガルの男子小屋に内在している物質文化の検討から導き出されたいくつかの機能を指摘したのだが，それら物質文化の内容は年月の経過ともに変化してゆくであろうし，それによって当然，この男子小屋の機能に Schurtz のいうような“Umbildung”（変化）が現われてくるのであろう[31]。

現時点においては，総数789の物質文化を伝統文化と新来文化とに区別してみると，前者が249の31%，後者が540の69%に相当する。石貨や貝貨はともかく，生計をまかなう自給自足経済の続くかぎり，素材の変化はあろうとも伝統文化の代表としてラン村の海域に適応した漁労具は存続するであろう。しかし，その他の多くの物質文化は，安価に現金で入手できるもの

であればあるほど，急速に外来文化に置き換えられ，増加してゆくのであろう[32]。

ここにこのマヤガルの男子小屋における歴史的発展過程の一段階をとらえて歴史再構成の拠り所としたい[33]。

謝　辞

このたびの筆者の調査と研究に対して，多大の理解と協力をいただいたラン村の waaz, mangabuchang とその拡大家族の方々，ギリペス村の kemimede の諸氏に心底より謝意を表し，ここに銘記する次第である。

注

(1) Schlesier,E. 1953 「Die Erscheinungsformen des Männerhauses und das Klubwesen in Mikronesien」 S.13-128.

(2) Kubary,J.S. 1889 「Ethnographische Beiträge zur Kenntnis des Karolinen Archipels」 1.

(3) Tischner,H. 1934 「Hausformen in Ozeanien.」

(4) Schlesier,E. 1953 op. cit.,

(5) Schneider,D.M. 1962 「Double descent on Yap」 The journal of the Polynesian society vol.71-1.

(6) Schlesier,E. 1953 op, cit., S.51.

(7) Müller,W. 1917 「Yap」 Ergebnisse der Hamburg Sudsee Expedition, S.134.

(8) ibid., S.168.

(9) 早川　正一　1978　「西カロリン諸島ヤップの土器」　小林知生教授退職記念考古学論文集　69－78 頁。

(10) 牛島　　巌　1974 「ミクロネシア・ヤップ島民族学的調査予備報告」　南山大学人類学研究所紀要　3　6－11 頁。

(11) 杉本　尚次　1969　「日本民家の南方要素について」　日本民家の研究　220 頁。

(12) 染木　　煦　1945　「ミクロネシアの風土と民具」　313－316 頁。

(13) 杉浦　健一　1939　「ヤップ島民の漁業と漁具」　人類学雑誌　54－2　61 頁。

(14) 前掲書　61 頁。

(15) 松岡　静雄　1943　「ミクロネシア民族誌」　322 頁。

(16) 染木　　煦　1945　前掲書(12)　299 頁。

(17) 松岡　静雄　1943　前掲書(15)　451 頁。

(18) 染木　　煦　1945　前掲書(12)　387－388 頁。

(19) 杉浦　健一　1939　前掲書(13)　60, 62 頁。

(20) 前掲書　62 頁。

(21) 前掲書　62 頁。
　　藪内　芳彦　編　1978　「漁撈文化人類学の基本的文献資料とその補説的研究」　686 頁。

(22) 杉浦　健一　1939　前掲書(13)　60 頁。

(23) 染木　　煦　1945　前掲書(12)　315 頁。

(24) Murdock, G.P. 1945 「The Common Denominator of Culture」 The Science of Man in the World Crisis.

(25) Alkire, W.H. 1977 「An Introduction to the Peoples and Cultures of Micronesia」 p.33.

(26) 牛島　　巌　1974　前掲書(10)　9 頁。

(27) 前掲書　8－9頁。

(28) 杉浦　健一　1939　前掲書(13)　56－57頁。

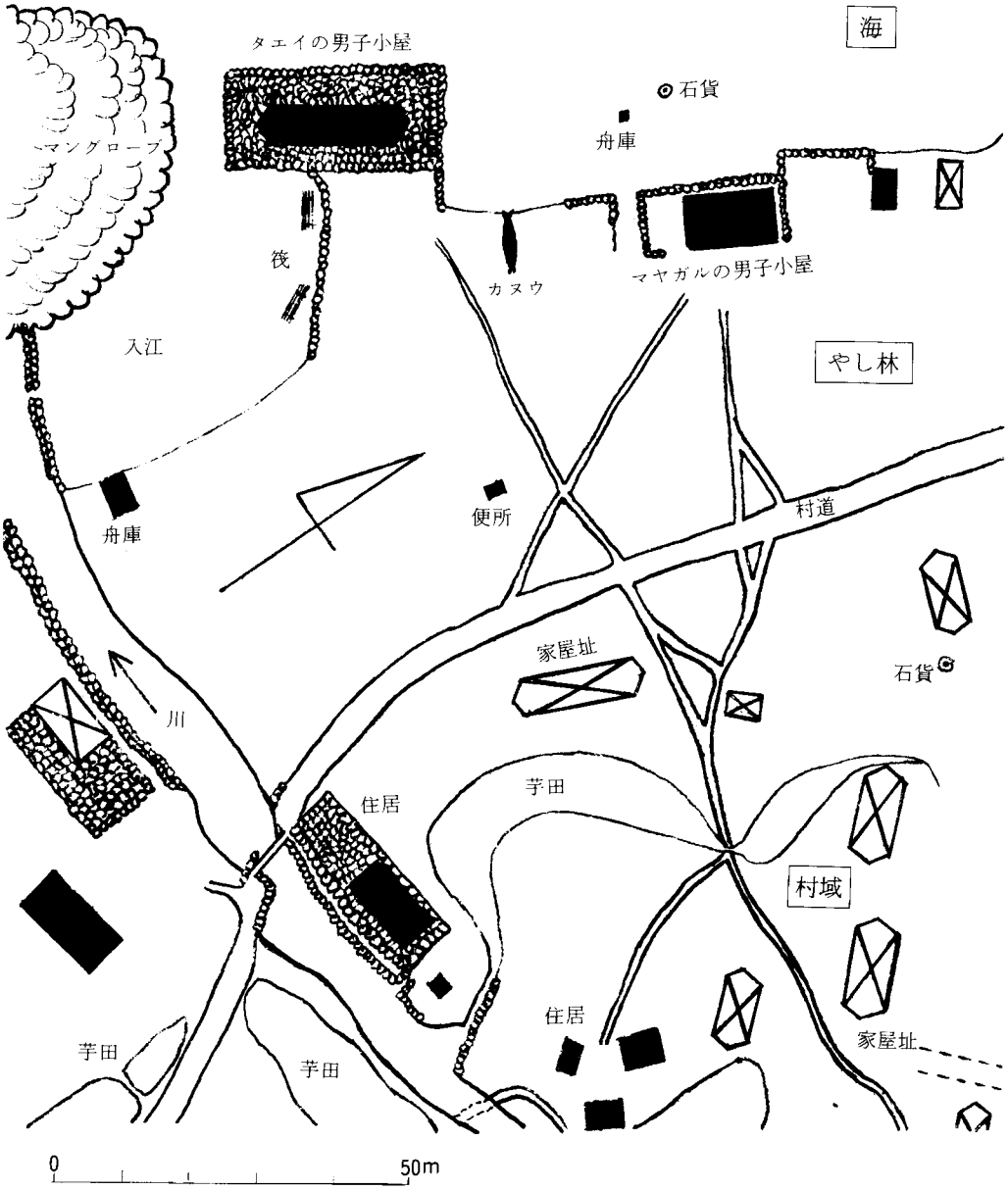
(29) Schurtz, H.　1902　「Altersklassen und Männerbünde」　S.203.

(30) 矢内原忠雄　1938　「南洋群島の研究」　362頁。

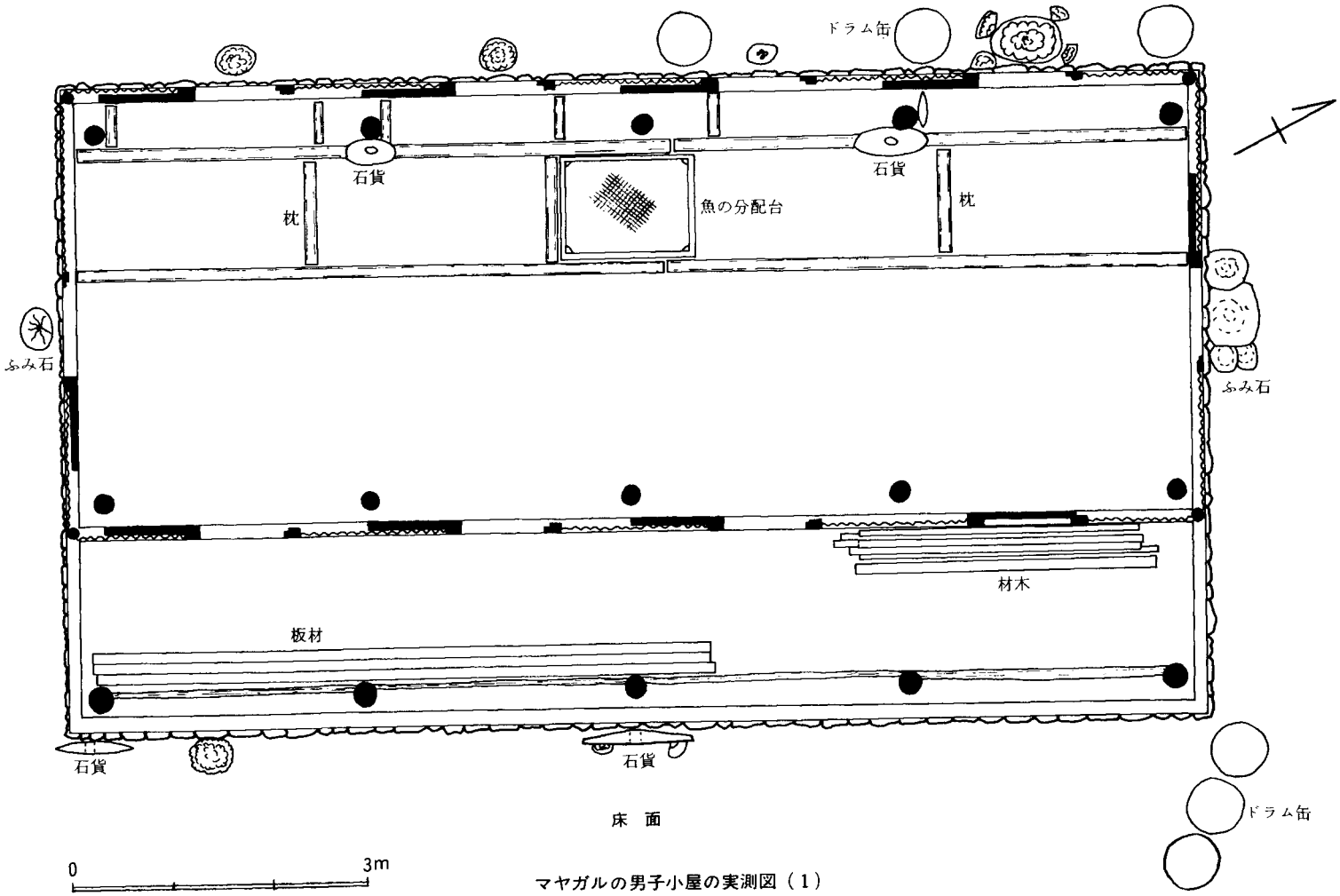
(31) Schurtz, H.　1902　前掲書(29)　S.100.

(32) 青柳まちこ　1977　「文化変容と社会組織－ミクロネシア・ヤップとパラオの場合－」　史苑　37－2　54頁。

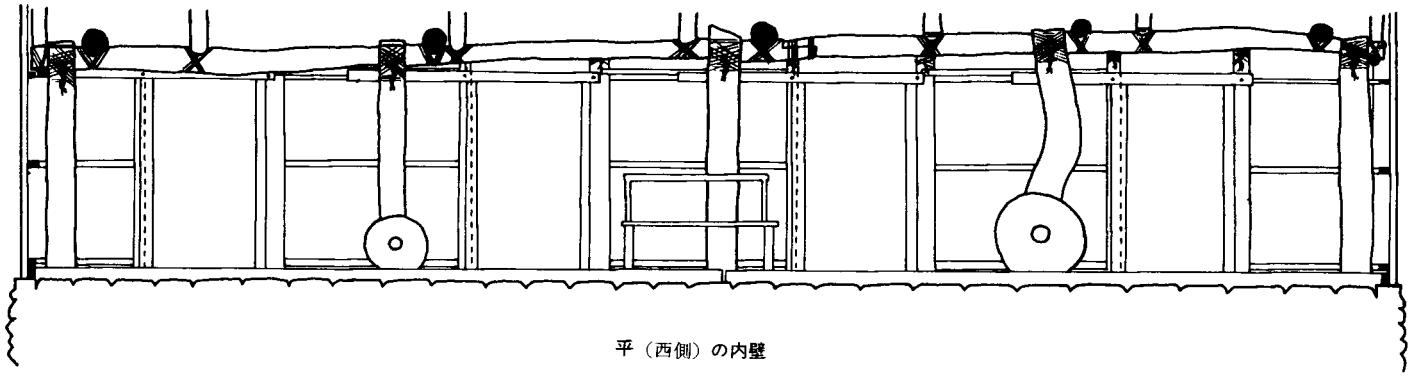
(33) 石川　栄吉　1970　「シュレジアーの仮説」原始共同体－民族学的研究　110頁。



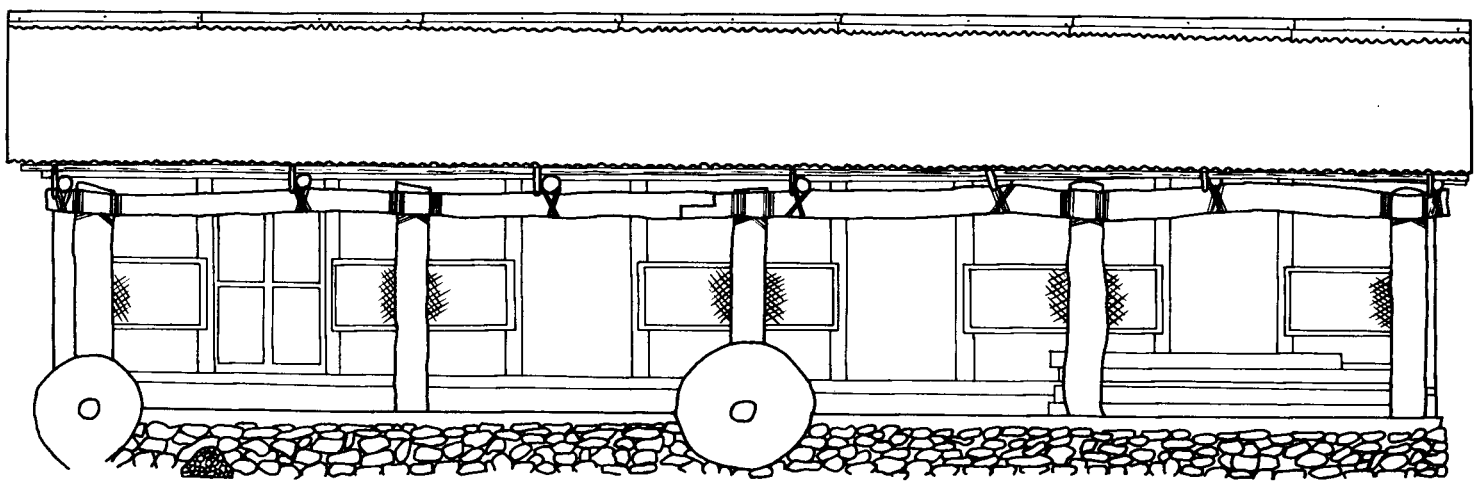
ヤップ島ラン村の集落図（部分）



マヤガルの男子小屋の実測図（1）



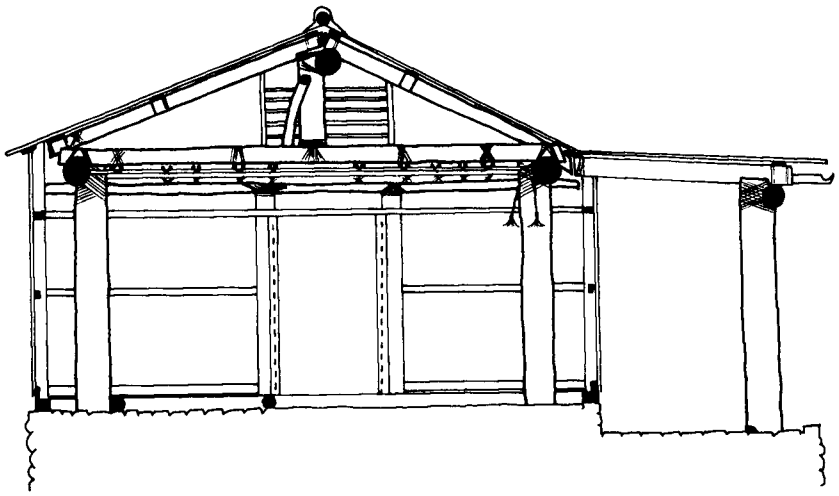
平（西側）の内壁



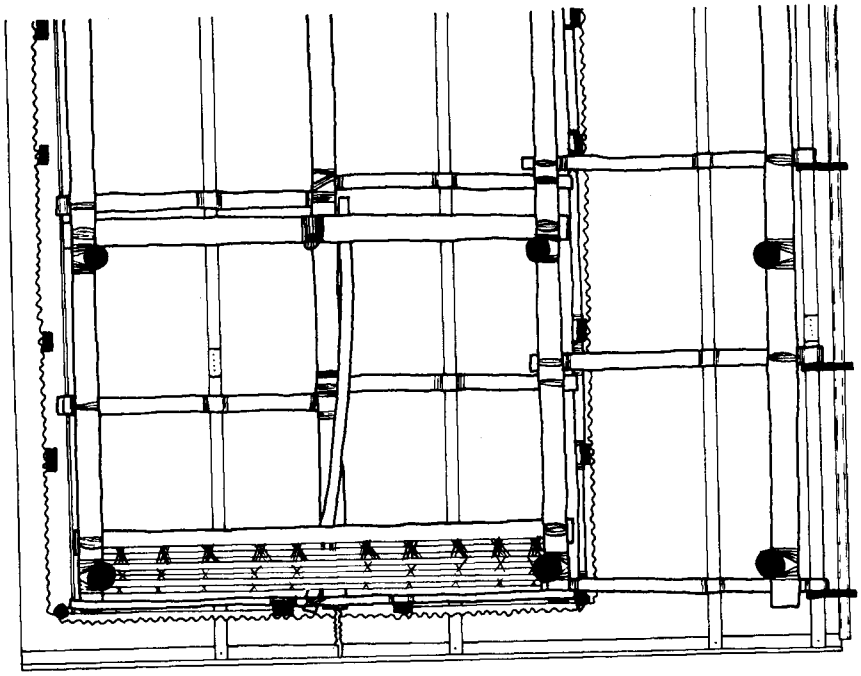
屋根および平（東側）の外壁と縁

0　3m

マヤガルの男子小屋の実測図（2）



妻（北側）の内壁



天井（南側）

マヤガルの男子小屋の実測図（3）